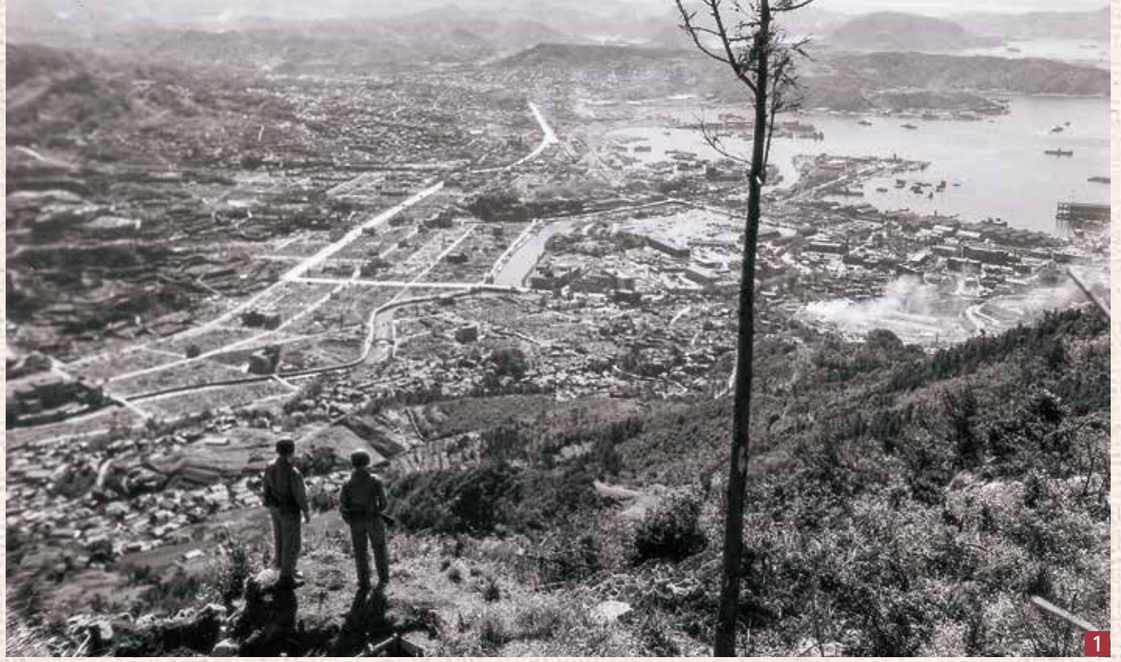


1

特集
昭和100年、誓いの夏～戦後80年の記憶～

今から80年前。先の大戦において、本市は佐世保空襲や戦争への出征などで、多くの人が犠牲となったり困難を強いられたりしました。令和の佐世保は、九十九島やクルーズ客船の寄港など、平和な日常が広がっています。しかし、世界では紛争や対立が絶えることはありません。ことしは昭和100年という節目の年です。戦争の記憶をたどりながら、今ある日常の尊さを見つめ直してみませんか。平和への誓いを、次の世代につなげる夏にしましょう。

佐世保空襲（昭和20年6月28－29日）

空襲の被害と継承

昭和20年6月28日午後11時58分、空襲の予告を知らせる「警戒警報」なしに、いきなり「空襲警報」を知らせるサイレンが断続して鳴り始め、約1トンの焼夷（しょうい）弾が次々と市街地に投下されました。2時間におよんだ爆撃により瞬く間に市街地は火の海と化し、犠牲者は1,242人、178万平方メートル（市街地面積の約3分の1）が焼失しました。

佐世保市役所をはじめ佐世保警察署や佐世保郵便局、玉屋デパートなども焼失してしまうなど、現在からは想像できない光景が広がっていたと思われます。空襲の継承や追悼のため、本市では毎年6月29日の「佐世保空襲の日」にサイレンを鳴らし黙とうを実施している他、今年度からは「佐世保空襲死没者献花式」を開催し献花を受け付けています。

2

3

4

5

6

7

1 佐世保港周辺 2 MR高架橋、旧親和銀行本店周辺 3 八幡神社周辺 4 佐世保駅周辺 5 島瀬町、本島町、光月町、宮崎町周辺 6 本通り（国道35号線） 7 夜店通り
※写真提供：芸文堂刊「終戦直後の佐世保」。

戦争の記憶

山口 廣光 さん（元 佐世保空襲犠牲者遺族会 副会長）

佐世保空襲を6歳の時に経験されました。当時の経験や戦後の暮らし、次世代の人たちに向けたメッセージなどを語っていただきました。全編は下記二次元コード（広報させぼプラス）からご覧ください。紙面ではその中から抜粋して紹介します。

佐世保空襲犠牲者を慰霊する鎮魂慰霊平和祈願の塔

佐世保が燃えて明るかった夜

当時は松浦町で家族4人で暮らしていて、軍刀を売る店を営んでいました。空襲の1カ月程前に父が相浦の海兵団に召集されたため、店を閉じて一家で相浦に移りました。6月28日の夜、ゴォーンという空襲警報が鳴りました。その日は大雨で、「こんな日に空襲はない」とみんな安心して寝ていたところでした。防空頭巾をかぶって、家族で近くの小高い山の防空壕（ごう）に避難しました。夜なのに外が明るかったのを覚えています。B29（大型爆撃機）が焼夷（しょうい）弾を落としていて、佐世保の町が燃えているから明るく見えたんだと思います。

山口さんが書いた相浦から見た佐世保空襲の絵

2日後、母と一緒に電車で左石駅まで行き、そこから歩いて佐世保郵便局へ向かいました。空襲で亡くなった親族の安否を確認するためです。名切グラウンドには多くの遺体が並べられていて、父はその中から自分の父（私の祖父）を見つけました。祖父は警防団の地区隊長で、空襲の夜も火を消そうとして水兵たちと一緒に亡くなったそうです。まるで子どもを抱くような格好で亡くなっていたと聞きました。

また、祖母と父の妹、その子ども4人は松川町の自宅にいたのですが、祖母が「家を離れたくない」と言って畳の下に掘られた防空壕に避難していました。祖母を含め一家6人は、家が燃えて焼死してしまいました。防空壕の場所によっては、熱風で窒息死することもあったみたいで、空襲というのは本当に非情です。

戦後の生活は本当に苦しかった

佐世保の市街地は3分の1が焼けました。私たちの家も店も全て燃えてしまって、軍刀も焼け焦げて使い物にならず財産も何も残りませんでした。

戦後は、母の実家がある三川内に身を寄せた後、祖父が残していたお金で伊万里に土地と家を買い、兄弟たちと生活を始めました。最初のうちは多少の蓄えもあって食べ物に困ることはありませんでしたが、父が人にだまされて保証倒れになり、勉強机も生活道具も全て持っていかれました。それからは何を食べていたかもほとんど覚えていません。

私は佐世保南高校に通っていましたが退学し、夜間学校（現在の佐世保中央高校）に行きながら、共済病院でアルバイトをしていました。その後、父が福岡で倒れて共済病院で亡くなりました。

戦後の生活は本当に苦しかった。空襲を受けていなければ、家も財産も残って、もう少し楽だったかもしれません。土地さえ自分の物であれば良かったんですが、あの当時、市街地の多くは借地で何もかも失ってしまった人が大勢いました。

命は一つしかない

日本は絶対に戦争をやってはいけません。今の平和が続くことを望んでいますし、平和な世の中を続けていくためには若者の力が必要です。

佐世保空襲死没者献花式に出席した山口さん

今の若い人たちに伝えたいことは、戦争だけは絶対にしてはいけないということと、それ以上に「命は一つしかない」ということ。宗教や立場の違いがあっても、人間には話し合う力があります。その力を使って平和を守ってほしいと思います。

戦争で犠牲になるのは戦う人たちだけではありません。空襲では、赤ちゃんやお年寄りも含め一般市民がたくさん命を落としました。だから、今の平和を当たり前と思わず、大切にしてもらいたいです。

（取材日　6月17日）

広報させぼプラス

YouTube
佐世保市チャンネル

引き揚げの港 - 浦頭 -

終戦に伴い約 629 万人の日本人が、海外から祖国の日本に帰還しました。日本へ帰還することを「引き揚げ」と言い、全国の引き揚げ拠点の一つが、約 139 万人が戻ってきた「浦頭」です。全国で最も多かった博多に次ぐ引き揚げ者数で、日本を代表する引き揚げの港でした。

過酷な状況の中、日本に帰ってきた引き揚げ者には宿泊施設や医療が提供されるなど、浦頭は戦後復興において重要な役割を果たしました。

1

引き揚げ船内

2

船内に多くの引き揚げ者がいる様子

引き揚げ者検疫

3

浦頭検疫所で引き揚げ者が厳重な検査と消毒を受けている様子

収容所へ向かう引き揚げ者

4

収容所となった佐世保引揚援護局へ約 7km の起伏がある道を歩いている様子

南風崎郵便局針尾分室

5

乗車券の交付を待つ人たちの様子

南風崎駅

6

引き揚げ者がそれぞれの故郷へ帰る際に利用した南風崎駅の様子

ぼごた丸

7

フィリピンに埋葬されていた 4,515 人の遺体と 307 柱の遺骨を搬送した引き揚げ船

※写真提供：1 2 3 4 6 芸文堂刊「終戦直後の佐世保」、5 7 市立図書館。

引揚第一歩の地 - 現在の浦頭 -

令和 6 年 6 月、浦頭にある佐世保クルーズセンターの供用が開始されました。今日まで、国内外問わず多くの乗客を乗せたクルーズ客船が寄港しています。

その佐世保クルーズセンターの近くに「引揚第一歩の地」の記念碑があります。引き揚げ者が最初に祖国の土を踏んだ地として建てられました。終戦後引き揚げ者を迎えた浦頭は、クルーズ客船の乗客を迎える地として新たな歴史を刻んでいます。

浦頭引揚記念資料館

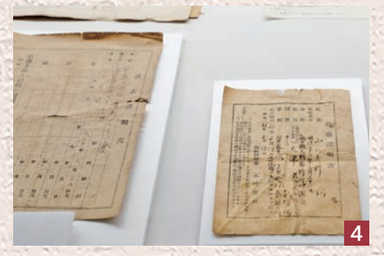
浦頭に引き揚げてきた人たちの足跡を郷土の歴史的遺産として後世に伝えるため、浦頭引揚記念平和公園内に浦頭引揚記念資料館を設立し運営しています。ぜひ足を運んでいただき、引き揚げの歴史に触れてみてください。入館は無料です。

市 HP
（浦頭引揚記念資料館）

1

2

3


4

5

1 引き揚げてきた人が身につけていた衣服、帽子、かばん 2 引き揚げ船の中で生まれた子どもに船長が命名した命名書 3 引き揚げ船の模型、水筒などの日用品 4 引揚証明書 5 認識票、はし袋など

平和を祈る黙とうをお願いします

8 月 15 日（金）に日本武道館で開催される「全国戦没者追悼式」に合わせ、正午にサイレンを鳴らしますので、犠牲者のご冥福をお祈りする黙とうをお願いします。

佐世保市戦没者追悼式を執り行います

旧佐世保鎮守府管内戦没者や本市出身戦没者を追悼するため、佐世保市戦没者追悼式を執り行います。どなたでも参列できます。

日程　10 月 25 日（土）10 時～ 11 時 30 分
場所　東公園（佐世保東山海軍墓地）

市 HP
（佐世保市戦没者追悼式）

特集に関する問い合わせ　市民安全安心課　☎ 24-1111